

浦添ようどれ

浦添ようどれは、浦添グスクの北側崖下にある琉球王国初期の王陵で、咸淳年間(1265-1274年)に英祖王が築いたといわれています。その後1620年に、浦添出身の尚寧王が改修し、王自身もここに葬られました。岩壁に横穴を掘り墓室とし、中には中国産の石で作られた石厨子があります。向かって右側が英祖王、左側が尚寧王の墓といわれています。「ようどれ」とは琉球語の夕風です。



くら うじょう 暗しん御門 (昭和9年 田邊 泰 撮影)

ようどれの前庭からトンネル状の暗しん御門を通して、二番庭へ行きます。そこは暗く、あの世にでも行くような雰囲気でしたが、去る沖縄戦で上部の岩は崩れてしまいました。



復元された浦添ようどれ



とうしつ せいしつ 東室(尚寧王陵)と西室(英祖王陵) (昭和10年代 坂本万七撮影)



西室内部



東室内部



いしじし 石獅子

東室(尚寧王陵)の袖石積みには、墓を守るように石獅子が座っています。もとは左右一対でしたが、右側の石獅子は沖縄戦で失われました。

ようどれのひのもん(極楽山之碑)

尚寧王がようどれを改修工事した記念碑です(1620年建立)。石碑には、ようどれを立派に改修したことや、尚寧が浦添家から国王に迎えられたという内容が記されています。戦後、琉球政府が復元しました。



いしずし 西室(英祖王陵)の石厨子

石厨子には仏像や花、獅子などが浮彫されています。台座には中国泉州の石彫様式と似た浮彫があります。沖縄に現存する最古の仏像彫刻です。